

# 文革時期の中国木偶戲 —舟山群島「東昇木偶劇団」を例として—

毛 久 燕

## Abstract

This work, an investigation of Dongsheng Puppet Play Troupe in the Zhoushan Archipelago, had an insight into the history of Chinese Puppet Plays during the Great Cultural Revolution period.

In terms of the national trends, it was not only Puppet Plays, one kind of folk performing arts, that was targeted for criticism as one of the "four olds" (old thought, culture, customs, habits) in those days. The presentation of the traditions drama that is a main component of Puppet Plays was prohibited, but also the stage, doll heads and tools were almost all burnt and suffered devastating damage. The influence lasts to the present. However, there are few concrete documents and records about the damage, and until now there was hardly a study about it.

In this work, we examined the Dongsheng Puppet Play Troupe in the Zhoushan Archipelago as an example to concretely analyze and investigate the influence of the Great Cultural Revolution on Puppet Plays, from the perspective of replacing the "do away with the 'four olds'" movement and traditional dramas with the revolution model dramas in modern times, as well as the influence on the living of those old performers in the Zhoushan Archipelago.

キーワード……木偶戲 文革大革命 破四旧 舟山

## I はじめに

文化大革命、いわゆる文革時期の中国の木偶戲については、資料や記録などが少く、従来の研究ではほとんど触れられていない。本稿は、舟山群島の東昇木偶劇団を例として取り上げ、文革が中国木偶戲や木偶芸人に与えた影響を明らかにしたい。

資料については、主に①文革を経験した舟山木偶芸人の聞き取り調査、②元東昇木偶劇団の若手団員であった朱愛蘭所蔵の文革後期（1972-78）の資料と舟山市档案馆所蔵資料、③各地の木偶戲研究に見られる芸人たちの文革に関する回想録、④ネットでの記事、などを利用した。

## Ⅱ 全国の動き

### 1. 建国から文革開始まで（1949 年～1966 年）

中華人民共和国成立後の 1950 年代、中国では多くの公的な木偶劇団が組織された、そのきっかけは、「ソ連人形劇の父」と称されるオブラスツォーフ（Sergei Vladimirovich Obraztsov、1901 年生まれ）がソ連芸術代表団のメンバーとして中国を訪問したことだという。（山下 2013）

オブラスツォーフは 1952 年 11 月から 1953 年 1 月まではほぼ 3 カ月中国に滞在した。彼は北京を訪ねた時、周恩来総理に、中国には国立の人形劇団があるか尋ねた。

当時文化部（日本の文科省に相当）副部長だった夏衍が「ある」と答えると、このソ連の専門家は、すぐに中国人形劇団の上演を見たいと言った。当時は遼西文工団木偶劇団が東北地区唯一の職業人形劇団であったので、この団を毎晩北京に呼んでオブラスツォーフたちのために上演を行わせたところ、大いに評価された、という。（杜一明、2009）

これについて、周恩来は「關於戲曲改革的幾個問題」（「演劇改革に関する幾つかの問題について」）（1952 年 11 月 14 日発表）で次のように発言している。

「埋もれてしまっているたくさんの演劇芸術を、我々はいま発掘しなければならないが、我々はこの仕事をまだほんの少ししかできていない。今回訪中された人形劇の専門家のオブラスツォーフ氏は、我々の人形劇にたいへん関心を持ち、… 我々は民間に埋もれている演劇芸術をきちんと発掘し、発展させることに力を注がなければならない。したがって、今はレベルの高低については考えず、まずは『百花齊放』（自由に創作し、批評すること）しなければならない。（『周恩来文化文選』122 頁）

それで文化部は、1953 年の初めに遼西文工団木偶劇団の 23 名のメンバーを全員北京に配置換えし、中国木偶芸術劇団（現在の中国木偶劇院）を設立した。（前掲、杜一明）

周恩来の支持を得たオブラスツォーフは、さらに上海・瀋陽・済南・太原・広州・長沙・成都などの都市を次々に訪問し、その間、ほぼ毎日地方劇・人形劇・伝統民間芸能などの上演を見、各地の演劇研究者たちと接触したようだ（山下 2013）。例えば広州では広東省の梅県木偶劇団<sup>1)</sup>と芸術交流を行い、1952 年 11 月に訪れた四川省成都では、成都木偶皮影芸術劇院の前身の成都市木人組の上演を見た。一方、福建省の泉州木偶劇団は 1952 年冬、漳州布袋木偶と共にオブラスツォーフ訪問に合わせて上海で上演している。オブラスツォーフが訪問した劇団は、いずれもそれぞれの省を代表する劇団で、上演が評価された劇団は、いずれも公的劇団として組織を整えていった。

そして、1955 年には、文化部の主催で全国人形芝居と影絵芝居のコンクール「全国第一届木偶皮影観摩匯演」<sup>2)</sup>が北京で開催され、その後、各地で木偶戯上演会やコンクールなどが次々と実施されるようになった。

一方、中華人民共和国成立後、中国の戯曲（伝統演劇）は毛沢東が提唱した「百花齊放、推

陳出新（古いものを新しいものに変える）」という方針のもとに改革が始まった。木偶戲は民間戯曲の一種でもあり、この戯曲改革の影響は木偶戲にも及んだ。

戯曲改革は「改戲、改人、改制」<sup>3)</sup>を主な内容として行われ、その中でも「改戲」、つまり演目の改革に重きが置かれた。演目を現代物を中心にするか、それとも伝統戯を中心にするかという問題が、1950 年代中国演劇界の大きな争点であった。1960 年、文化部は、現代物（現代戯）、伝統戯、新作の歴史物（新編歴史劇）の三つを同時並行で上演する、「三並舉」の方針を提議した<sup>4)</sup>。

しかしその後、政治情勢は一変して、党上層部内での闘争が激しくなり、毛沢東は階級闘争の緊急性や社会主義教育の強化を強調した。それで、文学や演劇などは社会教育の手段として、政治闘争に巻き込まれた。

1963 年、毛沢東は指示で京劇上演管理を担当する文化部の役人に対して、演劇の現状を厳しく批判した。

「戯曲には、大量の封建的なものが存在し、社会主義のものは少ない。舞台に登場するのは、皆帝王将相、才子佳人を主人公とする封建的な内容を賛美するものである。（文化部はこれらを放置している。）文化部は文化管理の責任者であり、この問題を解決しなければいけない、きちんと反省してから、真剣に直すべきだ。そうしないなら、文化部の名前を『帝王将相部、才子佳人部、外国死人部』と改めるべきだ」。

この批判に応じて、演劇界では、演目をめぐる問題が再び提起された。「写十三年」<sup>5)</sup>というスローガンを掲げ、中華人民共和国成立後十三年の社会主義の生活を現すものだけを社会主義の文芸と認めた。つまり伝統戯も新作の歴史物の上演も禁止された。（『中国大百科全書』（戯曲巻）506 頁）民間演劇としての木偶戲もその「整風」に巻き込まれて、伝統戯と新作の歴史物の上演はすべて禁止され、現代物だけしか上演できなくなった。

中華人民共和国成立から文革開始までの 15 年間、ソ連からのオブラストォーフ訪問をきっかけとして、民間戯曲としての木偶戲は、政府の文化政策の中で重視され、公的な木偶劇団は次々と設立された。その間、演目に関する議論や党の権力闘争に巻き込まれることもあったが、新たに木偶戲の進むべき道を模索していた。

しかし、政治・経済領域から思想・文化・文学領域まで甚大な被害をもたらした文化大革命の勃発により、木偶戲はすべての上演活動を禁止されるという存亡の危機を迎えることになった。

## 2. 文革開始後（1966 年～1976 年）

文革が正式に始まったのは、「中国共産党中央委員会通知」（「五・一六通知」と略す）が配布された 1966 年 5 月 16 日である。その二週後の 6 月 1 日、『人民日報』には「横掃一切牛鬼蛇神」と題した社説が発表された。この社説で初めて「四旧」（古い思想、文化、風俗、習慣）を打ち

こわし、「四新」（新しい思想、文化、風俗、習慣）を打ち立てることが文革の重要任務として提唱された。社説は次のように述べる。

「プロレタリア文化革命は、何千年来すべての搾取階級が創建した毒害があるもの、即ち旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣を徹底して打ちこわさなければならない。そして、多くの人民の間に、新たなプロレタリアの新思想、新文化、新風俗、新習慣を打ち立てる」。

「破四旧」運動は北京から、急速に全国に広がり、様々な領域が被害を蒙った。戯曲界は特に大きな影響を受けた。木偶戲の世界においても、舞台や道具、台本、また旧小説など台本の参照用に先代から伝えられた書籍も「四旧」の対象として燃やされた。

中国木偶芸術劇団について述べると、「文革前に三部屋の展示室<sup>6)</sup>に展示されていたチェコ、ポーランド、ソ連、日本など 16 国の木偶戲の人形や影絵人形、また中国の四川省、陝西省、湖南省、広東省、福建省などの木偶戲、影絵芝居に関する歴史資料など、総計 170 点が、すべて失われた。その人形や精巧な木偶戲舞台の模型は、劇団の中庭に運び出され、そこで燃やされてしまった。その時、劇団の管理機構は崩壊し、団員はすべて下放<sup>7)</sup>された。「四旧」に属すとみなされた団員の私物（人形、台本など）もすべて没収された。普段上演するときに使う人形や舞台などは、管理されずに回廊に放置された。それで、子供たちの玩具となり、最後は捨てられたものが多かった。一方、保存されていた資料や人形なども、管理人不在の状態で、箱に入れたまま倉庫に放置され、雨漏りのため腐乱して、結局はやはりゴミとして処理された。一部の人形は風化でひび割れ、使用できなくなった。

1970 年の末、劇団に戻った団員は部屋の掃除を行った。その時、たくさんの頭がない人形と衣装が破れた人形が発見されたが、ボイラー室の燃料として燃やしてしまった」という。（雁書 1996）

### 3. 「革命样板戲」の流行

「革命样板戲」とは中国共産党を称揚するストーリーを、伝統的な京劇や、バレエなどで表現したもので、「革命样板戲」という時の「戲」には、ピアノ曲やバレエ曲、交響楽も含む、文革開始後、戯曲において伝統戲などの伝統演目は、すべて「帝王将相、才子佳人」を讃える「封・資・修」（封建主義・資本主義・修正主義）のものとして批判された。当時の人々は、繰り返し「革命样板戲」を見るのが娯楽のすべてであった。

文革初期に演じられた「革命样板戲」は、現代京劇「智取威虎山」「海港」「紅灯記」「沙家浜」「奇襲白虎団」とバレエ「白毛女」「紅色娘子軍」および交響楽「沙家浜」だけで、これだけが、テレビやラジオで放送され、劇場で上演されていた。

「革命样板戲」は広くさまざまな形式で上演されたが、一方、それらを勝手に改編したり、真似たりすることは許されなかった。「丑化样板戲」（样板戲を醜く描く）「破壊样板戲」（样板戲を破壊する）などの政治重罪に関わるというので、慎重に取り扱われた。

だから、当時は「八億人民八個戲、毎人都能唱幾句。万里江山万花稀、一看八年不許膩。」

（8億の人々は8つの出し物しか見られない、皆少しなりとも歌える。広い国土に花は少ない、「革命样板戲」は八年見ても、うんざりすることは許されない。）というような歌謡が流伝していた。

1970 年までの状況は、この様であったが、70 年代に入ると、政治情勢が緩和したのに伴い、その厳しさも少し弱まった。

1971 年、党副主席であった林彪が企てた毛沢東打倒のクーデターが失敗し、周恩来が國務院を主宰するようになり、ようやく中国は荒廃した秩序の再建や経済の回復に向かい始めた。毛沢東への個人崇拜に関わる語録歌<sup>8)</sup>や忠字舞<sup>9)</sup>などは衰退し、「封・資・修」として批判された映画や音楽、舞踊などの上演が徐々に回復し、外国との交流も再開した。

「革命样板戲」もそれまでの八つから、1974 年には十七まで増えた。即ち、前述の八つのほか、ピアノ曲「紅灯記」・ピアノ協奏曲「黄河」・革命現代京劇「龍江頌」「紅色娘子軍」「平野作戦」「杜鵑山」・革命現代舞踊劇「沂蒙頌」「草原女兒」・革命交響楽「智取威虎山」である。（譚君 2013、85 頁）

「革命样板戲」は民間の歌や舞踊、音楽、語り物、木偶戲など様々な領域に取り入れられていた。長い間、上演ができなくなっていた地方劇、例えば上海の滬劇、広西の壮劇、湖南の花鼓戲、遼寧の評劇などは、「革命样板戲」をもとに、「移植」と呼ばれる改作を作ることにより、徐々に上演が回復した。（譚君、上掲論文 90 頁）

#### 4. 全国木偶皮影戲コンクール

1970 年代、木偶戲には大きな出来事があった。60 年以降行われていなかった全国木偶皮影戲コンクールが 15 年ぶりに 1975 年 11 月 11 日-12 月中旬に行われたのである。下記はそのプログラムである。（『北京日報』1975 年 11 月 1 日第 2 版、11 月 19 日第 4 版、12 月 4 日第 4 版、12 月 13 日第 4 版に掲載された記事により作成。原文のままのせる。）

1975 年全国木偶皮影戲コンクール上演表

演目	劇の種類	上演団体	場所
第一批			
平原作戦：第九場『爆炸軍火』（提線木偶漢劇移植革命現代京劇）、追車（布袋木偶、快板劇）、戦悪鯊（皮影、小歌劇）、争上工地（提線木偶、小漢劇）		広東省木偶劇団、陸豊県皮影劇団、五華県木偶劇団	東風劇場
紅燈記選段：『打不尽豹狼絶不下戰場』（紅小兵学唱鋼琴伴唱）、南瓜生蛋（小歌舞）、向陽河畔（小歌舞）、東海小哨兵（小歌舞）	木偶戲	上海市木偶劇団	民族宮礼堂
沙家浜：第四場『智闘』（秦腔移植革命現代京劇）、金扁献給毛主席（歌舞）、樂器合奏、舞踊等	木偶戲	陝西省木偶劇団	兒童劇場
小運動員（小歌劇）、学雷鋒（小歌劇）、采蘑菇（童話劇）等	皮影戲	湖南省木偶、皮影劇団	地質礼堂
智取威虎山：第一場『乘勝進軍』、第三場『深	木偶戲	黒竜江省哈爾濱市民	建築礼堂

山問苦』（学演革命現代京劇）、躍進紅旗迎風展、帶響的弓箭		間芸術劇院木偶劇団	
敬祝毛主席萬壽無疆（小歌舞）、漁港螺号（広州方言小歌劇）、向陽花（広州方言小歌劇）	木偶戲	広東省木偶劇団	民族宮礼堂
平原作戰：第六場『襲擾景城』（学演革命現代京劇）、高山勁松（漢劇）、兵壇新苗（小話劇）、小歌劇、舞蹈、女声表演唱等	木偶戲	湖北省木偶劇代表団	東風劇場
紅色娘子軍：第一場『常青指路』（碗碗腔移植革命現代京劇）、杜鵑山：第三場『情深如海』（阿宮腔移植革命現代京劇）、一顆苗（弦板腔）、山村新曲（碗碗腔）	皮影戲	陝西省華県碗碗腔皮影演出隊、富平県阿宮腔皮影演出隊、礼泉県弦板腔皮影演出隊	兒童劇場
平原作戰：第四場『智取炮楼』（学演革命現代京劇）、瑤山獵手（小歌劇）、器樂合奏、雜技、舞蹈等	木偶戲	湖南省木偶、皮影劇団	政法干校礼堂
龍江頌：第一場『承担重任』、第八場『開上風雲』（東北影腔移植革命現代京劇）、向陽花開、紅色信号	皮影戲	黒竜江省哈爾濱市民間芸術劇院木偶劇団	建築礼堂
第二批			
平原作戰：第三場『魚水情深』（粵劇移植革命現代京劇）、小紅哨（小歌劇）、紅軍標語（小話劇）	木偶戲	広西壮族自治区木偶劇団	公安部礼堂
白毛女：第七場『太陽出来了』（東北地方戲移植革命現代京劇）、爭奪（小話劇）、紅軍鞋（小舞劇）、舞蹈、表演唱、雜技等	木偶戲	遼寧省錦州市郊区木偶劇演出隊	兒童劇場
智取威虎山：第五場『打虎上山』（学演革命現代京劇）、小虎買瓜（京劇）、看女兒（小演唱）、歌舞、雜技	木偶戲	江蘇省揚州地区木偶劇団	政法干校礼堂
紅燈記：第六場『赴宴鬧鳩山』（学演革命現代京劇）、放羊歌、東海哨兵	木偶戲	福建省泉州市提線木偶劇団	東風劇場
学習大寨鉄姑娘（舞蹈）、一粒糧食一片心（舞蹈）、你追我赶学大寨（唢呐独奏）、草原紅花：第四場『英勇勝敵』、尾声『紅花向陽』（碗碗腔移植歌舞劇）、小歌舞、雜技等	木偶戲	山西省孝義県木偶劇団、浮山県毛毛木偶劇団	建築礼堂
智取威虎山：第三場『深山問苦』（高腔）、第六場『打進匪窟』（胡琴）（川劇移植革命現代京劇）、沙家浜：第四場『智闖』（彈戲）（川劇移植革命現代京劇）、小歌舞、小歌劇、四川清音等	木偶戲	四川省成都市、儀隴県、資中県、綿竹県木偶劇団	政法干校礼堂
草原紅花（歌舞劇）、大寨紅花篇遍地開（樂器合奏）、唱着歌兒上北京（小歌舞）、我愛北京天安門（歌舞）等	木偶戲	北京市木偶劇団	東風劇場

智取威虎山：第五場『打虎上山』（学演革命現代京劇）、紅雲岡：第四場『情深意長』、第七場『重返前線』（学演革命現代京劇）、山莊紅医（根拠同名豫劇改編）、打狼（童話劇）	皮影戲	河北省唐山市皮影劇団	児童劇場
智取威虎山：第五場『打虎上山』、第八場『計送情報』、第十場『会師百鷄宴』（学演革命現代京劇）、杜鵑山：第二場所『春吹杜鵑』（学演革命現代京劇）、小皮鞆的故事、紅松岡等	木偶戲	福建省龍溪地区布袋木偶劇団	公安部礼堂

このコンクールは2回に分けて行われ、第1回は上海、湖南、湖北、陝西、黒竜江、広東の代表団、第2回は北京、福建、広西、江蘇、遼寧、河北、山西、四川の代表団が参加した。上演された木偶戲と皮影戲の演目は合わせて100ある。上演表を見ると、各木偶劇団の演目には、革命現代京劇から取り入れたもの、ないしは移植革命現代京劇が必ず冒頭の演目となっているが、ほかに子供の生活を反映した児童劇や、オペラ、舞踊、交響楽、歌唱、雑技などもある。このコンクールについて、china.com.cn に載せる「中国現代木偶芸術発展概覽」では次のように評価されている。

「今回のコンクールは文革後期に行われたため、木偶戲はまだ文革の影響から離れていない。上演された演目は単一の題材（毛沢東や社会主義などを讃えるものを指す）に限られたが、取り入れられた演目のモチーフの処理や現代人物の造型、舞台装置などは有益な試みを導入していた」<sup>10)</sup>。

これは文革以来、中国木偶戲界の最大のイベントとして行われた。1966年文革開始後、「破四旧」の対象とされていた木偶戲にも、ようやく復活の兆しが見えた。

全国のこのような動きに対して、地方での木偶戲の活動は、どのような状態だったのだろうか。次の章では浙江省の舟山の東昇木偶劇団を例に考えてみたい。

### Ⅲ 当時の東昇木偶劇団

文革中、木偶戲に関わる全国の動きは既に述べた通りである。本章では、舟山の東昇木偶劇団で起きたことを、劇団創設から時系列に沿って、具体的に検討する。

#### 1. 文革開始前（1956年～1966年）

前述したように、オブラスツォーフの訪中を契機に、中国各地に多くの公的な木偶劇団が成立した。これらはほとんど省レベルの劇団であった。「全国第一届木偶皮影觀摩匯演（発表会）」（1955年）が行われると、省の下の方地方政府も、公的な木偶劇団の設立を考えるようになった。そのため、まず地方における個人戲班の調査や登録が必要となった。

浙江省の舟山では、1956年に省文化局の指示により曲芸（演芸、語り物）と木偶芸人の全面調査が行われた。各芸人は自分の状況をそれぞれ調査表に記入した。その調査結果と同年舟山

で行われた木偶戲のコンクールのプログラムによれば、舟山では少なくとも 20 木偶戲班、80 名の木偶芸人がいたことが分かる。（拙稿 a、2014、129 頁）

この調査結果を踏まえ、政府の指導のもと、舟山では 1959 年、10 名の有名な木偶芸人が連携して、公的な木偶劇団、即ち東昇木偶劇団（以下「東昇」と略す）が設立された。こうして成立した東昇は、1960 年代前半は上演が盛んで、木偶芸人の収入も他の職業より高かった。基本給のほか、上演が多ければ、それに応じて奨励金も出た。

しかし、木偶芸人は共産党の指導の下、思想教育のための芸人訓練班に参加しなければならず、合宿形式での相互批判が行われ、壁新聞が張り出された。自分が批判しなければ、相手に批判され、人間関係は疑心暗鬼になって、肉親の情や友情も失われた。その結果、芸人らに精神的に大きな影響を与えた。（拙稿 b、2014）

一方、「改戲、改人、改制」の戲曲改革（2 頁参照）の影響で、最も人気のあった伝統戲の上演が制限され、劇団の収入は急速に減少した。その代わりに現代物が推奨されたが、当初、新作の歴史物の上演は認められていたようだ。しかし 1964 年になると、伝統戲と新作の歴史物はすべて上演が禁止され、現代物しか上演できなくなり、劇団の経営は悪化する一方だった。「（劇団は）半年以上収入が十分ではなく、欠損が出た。そして、現代物上演以来、積立金を積み立てることができず、（現代劇を上演するための）新しい人形の衣裳を買い入れることもできなかった。」（減給申請書、拙稿 b、18 頁参照）と、劇団を管理する舟山専区曲芸木偶工作者協会が文教局に報告した。

以上の原因で、1965 年 5 月に文教局は劇団の減給を決めた。これに対して、芸人は不満を持ち、文句を言うだけでなく、政府と劇団に黙って当時公的に認められていなかった個人上演を行う者もいた。（拙稿 b、19 頁）

以上のように文革開始前の東昇は、政治に翻弄されて、経営不良の状況に陥った。だが、どんな状況でも木偶戲の上演は、継続していた。しかし 1966 年文革が始まり、上演禁止令が出されると、全国の木偶劇団同様、東昇も命令に従って上演を止めた。

## 2. 文革開始の通達と上演禁止の指示

1966 年 8 月 5 日、浙江省財政庁（財務庁）・浙江省文化局から「集団所有制劇団が文革に参加する時の経済問題についての聯合通達」（拙稿 b、26 頁註 22 参照）が發布された。

通達内容の三分の二は、文革に関する政治的プロパガンダで、「一切の文化文芸工作者は、共産党の呼びかけに応え、積極的に文革に加わるべきだ」と強調している。

この通達によって、東昇の上演活動は一切停止した。当然、劇団の収入もなくなるため、芸人たちは今後どのように生計をたてるのか。この問題については、以下のように記されている。

「各地域における集団化された劇団や曲芸団体は、既に、或は間もなく現地の共産党委員会の指導によって、次々と文革運動を展開するようになる。運動を実施するときには、しばらく



の間、上演活動がほとんど停止されるので、経済上の困難が出るはずだ。これらの団体の人々が安心して運動に参加できるように、上演禁止による経済上の困難については、各地の行政・財政部で検討して、劇団などの（職場の）実際状況や現地の財政能力に基づいて、できるだけ補助する」。

このように、団員の基本給は国の財政援助で提供されることになっていた。しかし、実際には財政の不足ため、その後も 1965 年 6 月と 1967 年 9 月に二回カットされている。支給を減らしても、財政は十分ではなかったようだ。

1967 年 9 月 9 日舟山地区文教局は、当時芸能などを管理していた舟山地区軍管会への報告で、「国からの財政援助を使い果たしたが、芸人の生活は困難である」と報告し、国の支給を継続するように求めた。また、国から支給するのが無理なら、今後「革命样板戲」の上演を許可できないかと尋ねた。さらに、芸人に別の職業につかせることを提案した。具体的には、例えば、

- ① 農作業が困難な虚弱な芸人は、商人として登録させた上で、開業資金を政府が提供する。
- ② 都市戸籍の芸人には、新たな仕事を斡旋する。
- ③ 高齢者には補助金を出し、家に帰らせる。
- ④ 農村戸籍の者は、現地の人民公社に参加できるが、本人が農作業を望まず、芸を続けることを希望する場合は補助金を出し、家に帰らせる。

〔档案 1958—1968 より〕

以上の報告を見ると、当時の東昇は経済的な困難を乗り越えるために、「革命样板戲」を上演することを考えていたことが分かる。そして、木偶芸人の鄭明祥によれば、木偶戲の「革命样板戲」は実際に舟山で上演したことがあるという。（後述）また、「帝王将相、才子佳人」批判による戯曲界の上演禁止や「革命样板戲」の上演などの戯曲界の動向は、地方の木偶戲にも大きな影響を及ぼしたことが分かる。

### 3. 「破四旧」運動

東昇団員だった王志裕によれば、文革開始後まもなく劇団は「破四旧」運動により、普段使っていた舞台や人形、道具などを舟山劇院広場（現在の定海文化広場）で焼却された。一部残されたものもあったが、上演禁止で使わないため、そのまま放置され、結局使えなくなったという。

当時、東昇はどれほどの被害を受けたのか。文革終結後、王志裕と潘渭漣、潘定良などは、舟山の木偶戲を復興するため、記憶によって東昇が文革中に紛失したものと紛失理由の項目表を作った。王志裕は 1973 年東昇解散後、文化局の指示によって劇団に残された頭、道具などの管理者であった。項目表は以下の通り。＊を付けたのは、王志裕の説明。

東昇木偶劇団における紛失道具類一覧

<一>舞台 大舞台、1；小舞台、2

<二>背景幕 龍宮殿、1枚；山景色、1枚；公堂（法廷）、1枚；家堂（屋敷の広間）、1枚；貧乏家、1枚

<三>衣装と道具 役人の長着（袍）：紅袍、1着；黄袍（龍袍、絹織物の生地）、1着；黒袍、1着；白袍、1着；青袍、1着。庶民の衣装（男性）：赤、1着；黄、1着；金、1着；黒、1着；薄青、1着；白、1着；黒、1着；黛色、1着；深紅、1着、ほかに薄黄のチョッキ、1枚。女性の衣装：淡紅（刺繍）、1着；薄黄色、1着；黒、1着；純白、1着、ほかに黒い縁飾りのチョッキ、1枚。「破四旧」で舟山劇院広場で燃やされたもの：帝、王、将、相の衣装約10組；唐の三蔵法師の衣装、1組。＊王の説明：舟山劇院広場で燃やされたもの以外も、ほとんどが管理が悪く腐敗。武器：18本一組の半分。女性の髪で作った伝統戲の人物の髭、雄鶏の羽で作った羽飾り、などの道具類も長期にわたり使用しなかったため腐敗。

<四>布類 緑の大舞台の囲布<sup>11)</sup>、1枚；濃紺の小舞台の囲布、1枚；蚊帳生地幕、2枚

<楽器>板胡（胡弓）、2；二胡、2；三弦、1；チャルメラ、1。値段：約300元；2つの二胡は、長期の上演停止で琴筒を覆う皮が腐敗、弓も紛失。値段：約10元。＊王の説明：2つの板胡は、長期の上演停止で使えなくなり、最後に行方不明になった。

<人形頭>約10個。＊王の説明：「破四旧」の時、舟山劇院広場で燃やされた。

<帳簿>王志裕と朱愛蘭が最後に決算した帳簿は、1966年6月以降朱愛蘭が管理している。

潘渭漣、潘定良、王志裕（署名）

1978年6月1日

〔档案1972年より作成〕

元東昇団員の朱愛蘭などの話によれば、東昇は1つの大舞台と2つの小舞台を持っていた。これは舞台の項目に記されている数と一致する。つまり、東昇の舞台は、文革時期にすべて無くなったことが分かる。その大舞台は、1960年代の初期に作られ、市内の劇場でしか使わない、小舞台は、2つとも解放前に作られたものであり、携帯に便利なので舟山の各島や市外への上演で用いられていたという。

5枚の背景幕も、朱の話とはほぼ一致する。前述の小舞台は背景幕を使用しないので、表に記されているのは、すべて大舞台で用いられたものである。それで、背景幕も文革時期には、すべて紛失したことがわかる。

衣装と道具類では、紛失した衣装の色や数について、詳細に記入されている。その中、「破四旧」で燃やされたのは「帝王将相の衣装約10組；唐の三蔵法師の衣装、1組」だけで、その他は、ほとんど長期の放置で腐敗したことが、王志裕の説明で分かる。また、布類と楽器も同じ原因で無くなっている。

人形頭の項目を見ると、燃やされたのはわりに少ない。舟山木偶戲の上演は、一般に一組 30 の人形頭を揃えなければならないという。東昇の 3 つの舞台で使用する人形頭は、少なくとも 90 必要である。人形頭 10 ではその九分の一しかない。残りの頭の行方については、ここで記入されていないが、腐敗して使えなくなったものもあることは予測できる。筆者が王志裕を訪ねた時、王は自宅の古い木箱に保存している幾つかの人形頭を出してきて、東昇の時に使ったものだと説明した。

また、東昇の団員には、元個人戲班の班主だった人が多く、自ら舞台や人形頭、道具などを持っていた人も多かった。個人の所有だったそれらの舞台や道具、台本類も文革時期に焼却され、被害を受けた。

東昇団員の鄭明祥（1929 年生まれ、普陀沈家門出身）が所蔵した台本や小説、楽譜などは「破四旧」の時に紅衛兵に差し押さえられた。その一部は父親から受け継いだものであった。二組（60 個）の人形も差し押さえられて燃やされた。

2011 年に鄭明祥を訪ねた時、同じ普陀出身の鄭龍江（1947 年生まれ）に会った。鄭龍江は樂器の伴奏を担当し、木偶戲を副業として現在も活動している。父親と祖父は木偶芸人であり、1955 年以前は棒遣いの長拷木偶<sup>12)</sup>を上演していた。長拷木偶は、舟山では解放前に存在したが、現在は失われた。文革の時、鄭龍江の家に所蔵した多くの長拷木偶の人形は、1968 年に紅衛兵に差し押さえられ、燃やされたり、捨てられたりした。鄭龍江は先代の宝物を残すため、幾つかの人形を隠そうとしたが、紅衛兵に「お前、まだあるのか、隠すことはできないぞ！出せ！」と脅されて、すべて焼いた、と言う。

舟山を代表する家族式木偶戲班「侯家班」の創立者、定海双橋出身の侯惠義<sup>13)</sup>は「破四旧」の時に、紅衛兵の「抄家」（家宅搜索し財産を没収すること）を怖がって、舞台や人形、多くの台本などをほとんど自ら家の庭で焼却した。幾つかの人形は玩具として隣の子供にやった、と言う。「侯家班」の伴奏を担当した定海干礮出身の顧国芳（1950-2012）の家は、父親と祖父が曾て長拷木偶の芸人だったので、文革前にはたくさんの長拷木偶の人形と台本などを所蔵していた。その中には鶯鶯と張生（『西廂記』の主人公）の人形もあったそうだ。しかし文革の時、顧の父は人形を金槌で壊して、台本などと一緒に焼却してしまった、という。

このような被害を受けたのは、舟山だけではなく、各地にあった。例えば、浙江省泰順県の木偶芸人の周徳は文革の時、被批判者として県の批判会に出された際、家に所蔵した台本や先代から引き継いだ旧小説など、合わせて 3000 冊を燃やされたという。（呉恒謙 2000、83 頁）

#### 4. 木偶戲の「革命样板戲」『紅灯記』

「革命样板戲」が全国で広く行われた際、東昇でも木偶戲でこれを上演することを考えた。その上演はどれぐらいの期間続いたか不明であるが、鄭明祥は、当時実際に上演したと言う。演目は現代京劇から取り入れた『紅灯記』である。

木偶戲で『紅灯記』を上演するときには、舞台と頭はそのまま使うが、衣装や道具などは変えないといけない。

まず『紅灯記』のあらすじを紹介する。

中国東北の被占領地区の鉄道員・李玉和と老母・李奶奶、十七歳の娘・李鉄梅の一家は、1922年の2・7ストライキの流血闘争で一つに結ばれた非血縁家族であった。共産党の秘密党员李玉和は1938年晩秋、党組織の柏山ゲリラ部隊へあてた暗号電報転送の任務を受ける。危険を察した李奶奶は、鉄梅に一家三代の歴史を切々と説いて聞かせ、鉄梅は革命の先人から送られた紅灯を受け継ぎ、秘密電報を守ることを誓う。日本憲兵隊長・鳩山は李玉和と李奶奶を逮捕して秘密電報の行方を追及するが得られず、二人を処刑する。鉄梅は父と祖母の意志を継ぎ、敵の追っ手を逃れ、柏山に暗号電報を届け、党の任務を完成する。

上述した李玉和や鳩山などには、新しい服や帽子が必要である。これらの衣装と飾りものは、すべて自分で作った。道具の銃も欠かせないので、木で作り、人形の肩に掛ける。物語に出てくる「紅灯」はボール紙を赤く塗って作った。銃声は解体したひと連なりの爆竹（「掛鞭」）を鳴らした。人形の顔は描き直したものもあるし、そのまま使ったものもある。例えば、主人公の李鉄梅の場合は、伝統戲でよく使う「丫髻」（女中）の頭をそのまま利用した。日本人の兵士の人形は三つ、警察用は二つ必要であった。

## 5. 舟山木偶芸人の暮らし

文革で木偶戲の上演ができなくなった後、舟山の木偶芸人は、どのように暮らししていたのかについて調べた。

鄭明祥は元東昇の団員であり、1964年木偶戲で「革命様板戲」を定海竺家弄2号の木偶劇場で上演したことがあるが、1965年原籍沈家門に帰されて、生活のために露店を開いた。

鄭明祥は、幼いころの病気で脚に障害が残ったので、重労働はできない。原籍に戻った後、漁業が盛んな沈家門で、家族と共に網を編むための梭作りの仕事を見つけ、露店を開いた。当時の沈家門では、梭を販売する露店が多かった。露店を開くには、品質が良い梭を作れることが最初の一步である。鄭明祥は各露店を回って、品質が良いものを調べた。最後は、知り合いから福利工場のある人が作った梭が最も良いと聞いて、その人から1角（0.1元）4本で各サイズを買い、それを真似て梭を作り始めた。しかし梭を作る材料の竹の供給量が制限され、多く手に入れるのが困難だった。一人が1回に申し込める量は2本であり、政府の証明も必要である。だから、梭を多く作るために、安い「挟竹」（船で使えなくなった竹）を利用した。漁船には普段使わない竹を舷側に置く習慣があり、船と船が近づくと、大きな圧力のため、竹が割れる場合が多い。時には、漁民が「挟竹」を持って梭と交換に来る場合もある。梭を作るのは手間がかかる。1本の梭は十何回も繰り返し削る必要があり、鄭明祥は妻、息子、娘と昼も夜もなしに作り続けた。文革中、鄭明祥はこのような暮らしを続け「当時、舞台や道具などがすべ

て燃やされたので、二度と木偶戯をすることはできない」と思っていたという。

一方、劇団に残った団員は、批判大会を開いたり、壁新聞を書くのが毎日の仕事であった。批判大会は劇を上演する舞台で行い、壁新聞は部屋に紐を張り渡して掛けた。また若い団員の間では「暴風雨戦闘隊」が設立され、北京と「串連」（経験交流）すると言って、中国政府と共産党の本部である中南海を訪ねたりした。朱愛蘭はその参加者の一人で、「暴風雨戦闘隊」と書いた赤い腕章は現在も保存しているという。

木偶芸人と曲芸芸人は、「九一五派」と「紅衛派」に分かれて争った<sup>14)</sup>。潘渭漣は「九一五派」、曲芸の侯惠義は「紅衛派」だった。この二派は互いに批判を行い、優勢な方が相手を批判する。批判大会は舞台で行われ、批判対象となった人は舞台に立たされた。舞台の前で大勢の批判者が大声で「打倒×××」と叫び、どなる声が外まで聞こえた。潘渭漣の妻によれば「夫は批判対象となった時に激しく批判されたことがあるが、殴られたことはない。批判者は曾ての仲間だった。逮捕はされず、批判が終われば、夜には家に帰ってきた」という。一方、潘渭漣も「紅衛派」の侯惠義を批判したことがある。侯惠義の長女、現在「侯家班」班主の侯雅飛は、当時のことをはっきり覚えている。

「父は当時曲芸をやっていた。演目はすべて「革命样板戯」であった。その日は『紅灯記』を上演した。私も見に行った。父は「はさみを磨く」一段の台詞を忘れて、慌てて即興で男の子が水鉄砲で日本人を射ち、共産党を援護したというモチーフを作って演じた。すると、見物人はすぐに大騒ぎをした。翌日の壁新聞には「革命样板戯」を勝手に改竄したと書かれた。潘渭漣などの「九一五派」はそれを罪として侯惠義を批判した」。

## 6. 文革後期の東昇（1972-76 年）

文革開始以来、東昇の団員は、年を取って原籍に戻されたり、転職させられたりしたため、1972 年にはもとの半分以上の 5 人となった。この 5 人は潘渭漣、邵永園、王志裕、潘定良、王如玉である<sup>15)</sup>。当時、東昇と曲芸の上演団体を管理した舟山専区曲芸木偶工作者協会は、既に舟山曲芸隊と名前を変更し、芸人は合わせて 22 人であった。6 年間上演活動は行っておらず、給料は政府の支援金から支給されていた。経済的に負担を感じた文教局は舟山曲芸隊を解散して、芸人をすべて解雇しようと考えた。

1972 年 5 月、解散後の転職問題をめぐって、22 名の芸人を対象とした調査が行われた。そのうち、転職することで文教局と合意して、転職先についてはっきり希望を言った者は 12 名、合意はしたものの転職先の希望までは言っていない者が 6 名である。転職について「未表明」の者は 4 名、つまりこの 4 人は黙ることによって劇団（団体）解散の提案を拒否したのである。東昇の潘渭漣と王志裕は「未表明」であった。

上記 3 種の反応から、芸人の中には文教局の劇団解散の提案について、不満や意見があったことが分かる。一方、文教局は芸人のこれらの考え方すべてを批判し、「現在は（芸人の間に）

幾つかの負の、批判的な考え方が存在している」と次のように述べている。（1972 年档案）

- ① 芸人は指導者に不満を持ち、文教局は陰謀に加担し、曲芸チームを解散させようとしていると噂している。また給与や食糧の給付など多くの要求を出している。
- ② 芸人は新たな状況に適応できず、早く転職して新しい生き方を捜そうとしている。
- ③ 芸人は労働を恐れ、苦難を恐れて、劇団にしがみ付こうとしている。

調査の結果は『關於曲芸隊<sup>16)</sup>芸人工作安排問題的反映』（「曲芸隊芸人転職問題に関する要望」資料 1 参照）という報告書に記録されている。それぞれの芸人の要望をまとめると、主に三種類に分けられる。

一、芸人が元所属していた公社の工場で働く。政府側は該当公社に 150 元資金を提供する。

二、退職して、政府の連絡を通じて元所属公社に戻る。政府側は芸人に 100 元の生活補助金を提供する。

三、許可証を得、商売、漁業、漆器工などの個人経営や他の職業に就く。政府側は初期資金を提供し、経営に関する必要な物資が手に入るよう便宜を図る。

団員の邵永園を例に述べると、邵は自分が所属した馬魯公社の「養路班」（道路管理課）で働きたい。「養路班」勤務員の選出は各大隊で選び、公社が決定する。文教局が一方的に決定することはできない。芸人の行く先はほとんど元所属公社や生産大隊である。そのため、文教局はまず団員と合意した上で、次に芸人が所属することになる公社や大隊にも聞かなければならないが、公社や大隊は芸人を受け入れることを望んでいなかった。邵永園の馬魯公社は、次のように受け入れない理由を述べる。

「小さい頃から我々の大隊の人員ではない。また、（木偶芸人であるので）体力のいる仕事ができないため、大隊の負担が増える。もしも無理にここに来させるならば、我々も現状を上を報告する」。

王志裕は「未表明」であるが、文教局は彼が所属していた小沙公社に意見を聞いた。小沙公社は次のように返事している。

「王を受け入れるには、条件がある。すなわち王が共同出資分を補うことだ」。

実は邵永園と王志裕の場合だけではなく、当時問い合わせを受けたすべての公社が芸人の受け入れを拒否した。舟山文教局はこの状況を上に報告し、芸人のために国投資の福利工場を建てるなどの解決案も考えた。結局、返事されなかった。（1972 年档案）

1973 年前後、政治状況は緩くなり、曲芸の上演は復活したが、木偶戲の上演は、まだ許されなかったため、文教局は東昇の団員をすべて曲芸の上演に参加させた。そのため、潘渭漣、王志裕と潘定良は 1973 年 8 月 13 日づけで、次のような「報告」を文教局に提出した。

「我々は十何年、或は何十年来、木偶戲を職業として、他の仕事には従事したことがありません。現在は木偶戲を上演するのは確かに困難ですが、曲芸をするのは、得意ではないので、

我々の状況をぜひ考慮してほしい」。

「報告」では、潘渭漣らは困難を乗り越えて東昇を復興する気持ちを強く訴えている。

ここで「困難」と言っているのは、その後の申請書（1973 年档案より）によると、舞台や道具、設備などの不備と木偶芸人の不足という二つのことを指していることがわかる。そこで文教局はその二つの「困難」を理由として、木偶芸人の潘渭漣らに曲芸をするようを勧めた。しかし、だが潘渭漣らはその提案を拒否した、その理由は「曲芸をするのは、得意ではない」というのだ。これは潘渭漣らが曲芸をしたくないための口実だろう。潘渭漣らはいずれもプロの木偶芸人で、遣い手（人形を操りながら歌う役割）であった。東昇の初期団員の半分以上は、最初、曲芸を習った木偶芸人であった。一方、昔は木偶戯をしていたが、解放後は曲芸に換わった例もある。例えば、定海双橋の侯惠義。「歌う」という役割から言えば、木偶芸人が曲芸に転換するのは可能である。文教局もそのような理解であったから、潘渭漣らの報告書に返事しなかった。

だが、木偶戯にあくまで執着した潘渭漣らは諦めずに、二十日後さらに木偶劇団を復興したいと申請した。申請書（1973 年档案より）では、舟山木偶戯の歴史や芸術特徴、現状などを述べ、復興の必要性を強調した上で、団員の構成や組織、経済分配制度、福祉制度などを細かく規定していた。そして、文革で舞台や多くの道具、人形の衣装、楽器などを失ったので、新しいものを買わなければならない。それで、申告書の後ろにはそれのための予算案も添付した。しかし、このように様々な努力をしても、結局認められずに終わった。

#### IV まとめ

本稿は、文革時期に中国木偶戯はどのような影響を受けたのかについて、舟山群島の東昇木偶劇団を中心に考察した。

1950 年代の全国木偶戯界では、たくさんの公的な木偶劇団が成立した。この動きに呼応して、舟山でも 1959 年に公的な木偶劇団の東昇が成立し、1960 年代前半には盛んに上演を行っていた。しかし、文革が始まると、上演ができなくなり、木偶戯舞台や道具、台本なども「破四旧」の運動で焼却された。失業した芸人は厳しい生活を強いられた。政治運動に巻き込まれた芸人は、批判され、精神的にも大きな打撃を受けた。1973 年から政治状況が緩くなり、その時東昇に残っていた潘渭漣（団長）、潘定良と王志裕は、劇団復興を目指して、報告書を書いたり、計画書や予算案を提出したりしたが、認められず、劇団は解散された。

東昇が復活できなかった理由の一つは、文革で失われた舞台や道具はすぐに準備できない；もう一つは、木偶芸人の不足にあった。例えば、上述した 1973 年の復興活動時には、元々 10 人以上の団員がいた東昇も、3 人しか残っていなかった。やめた人たちの中には、年を取って退職した人もいたし、鄭明祥のように転職した人もいた。前者は長時間の木偶戯上演には、もはや体力がもたないと考えられ、後者は他の仕事を見つけて、やる気を失ってしまった。潘渭

漣と潘定良も劇団解散後、希望して織物工場に転職した。

本稿で取り上げた東昇は、あくまで舟山という一地域の木偶劇団である。その規模や影響力から考えれば、文革で蒙った影響も、全国レベルの有名な劇団より弱かったのではないだろうか。例えば、現在は国の非物質文化遺産に認定されている浙江省の平陽木偶戲と泰順木偶戲の場合、文革時期の木偶芸人は農村に下放させられたり、干校<sup>17)</sup>に送られたり、「文芸黒線の反動芸術權威」（ブルジョア的文芸路線の反動的芸術權威）として批判されたり、より厳しい状況に置かれた。

1976 年、文革を主導した「四人組」（文革を主導した江青、張春橋、姚文元、王洪文の四名）が逮捕され、演劇界の活動は徐々に回復し、中国各地におけるたくさんの木偶劇団も活動を再開した。1978 年から、民間戲曲としての木偶戲はまた注目され、新聞や雑誌などにも木偶戲に関する記事や論文が見られるようになった<sup>18)</sup>。1981 年 11 月、第 4 回「全国木偶皮影觀摩匯演」が北京で開催され、木偶戲の上演も各地でまた見られるようになった。1978 年から、舟山では個人戲班の上演が再び認められるようになった。しかし、木偶芸人の数は大幅に減少した。1982 年檔案には、32 人の名前が見えるが、そのうち、12 人については既に活動停止と書かれている。

現在、中国では、国を挙げて非物質文化遺産（無形文化財遺産）保護活動に取り組んでいる。非物質文化遺産の認定は国家、省、市、区という 4 レベルに分けられる。木偶戲については、全国レベルのものが 20、次の省レベルについて、例えば浙江省では 10 カ所の木偶戲<sup>19)</sup>が非物質文化遺産に認定されている。舟山の木偶戲も、2009 年省レベルの非物質文化遺産に認定された。

しかし、現状を見ると、ほとんどの地域で、芸人が亡くなったり、高齢化して、木偶戲班を再建するのが難しい。元々木偶戲が盛んであった地域でも、現在は一つの戲班しか残っていないところも少なくない。ネットでは、ある地域の高齢の木偶芸人が技を披露したというニュースもよく見られる。それは、その地域の木偶戲が消滅する危険性があることの警鐘でもある。

## <資料>

資料 1： 关于曲艺队艺人安排工作问题的反映

根据近来艺人反映情况：

### 一、可先行安排下列 5 人

姚孝蒙、叶道品、洪述良：这三名盲艺人均家住白泉，本人要求安排在盲人工厂，白泉公社有盲人煤球厂，兼带胶木厂，胶木厂操作极简单最适应盲艺人，是否与分工联系，安排至该厂，投资按每人 150 元，共 450 元划给公社。夏良宽、王友娣：年老，动员回家处理。是否发给生活补助费每人 100 元。夏良宽劳动较好，身体好，全年不生一次病，要求回家后搞些轧棉花的家庭作业，维持本人生活，是否可以与当地烟墩公社联系，在政策许可下，给予照顾。这二人是盲艺人。

### 二、普陀县 3 人

柳美范：曲艺队走书演员，曾在冰鲜船做过会计，现尚有一定劳动能力，本人要求政府照顾批给五、六支毛竹，海边捕鱼约可月入 20 元左右。是否可以回家处理，发给数十元资金，上述要



求給以解决，并向沈家门镇联系。文化高中程度。吴兴法：年老，身（体）尚好，可以从事轻便工作，本人要求摆香烟摊。是否可以与沈家门镇革委会联系，批准其要求，发给生产资助金 70 元。亮眼，无文化。周松来：体力强，能担 300 斤担子，本人要求安排在沈家门盲人胶木厂，是否与沈家门镇军委联系安排落实，给予该厂投资 150 元。（本人盲人，但能走路及□物，简单□力等）

### 三、其他艺人反映：4 人

王文彪：要求安排做大饼（从小做过大饼，油条）或做漆匠（有证商贩），能参加劳动协会。文化高中程度。王祖跃：要求安排酒厂，搞技工。本人小时搞过较长时间的酿酒工作，大跃进由公社把他调出，58-62 年在安徽国管芜湖酒厂当技工。大办农业时该厂关闭，回来。文化一般，珠算熟练。邵永园：原木偶戏剧团。要求安排在当地——马岙公社养路班工作，养路班人员由公社向各大队抽来，人员决定权在公社，工资报销每月在汽车站工路□领。本人劳动较好，能吃苦耐劳，并有一定文化水平。王小宝：要求安排在石礁公社盲人胶木厂，是否给予联系落实，向该厂投资 150 元。

四、老艺人中未表示的有侯达芳、潘渭涟、范良峰、王志裕，4 人。青年中未表示具体工作，但都是希望安排工作，共 6 人。〔档案 1972〕

## <注>

- 1) 1951 年成立、劇団員は 20 数名、既存の樂堯天・奏吉祥・榮華堂・富天彩・合一声・樂昇平の 6 つの糸操り人形戲班が合併した劇団。
- 2) 「全国木偶皮影觀摩匯演」は、ほぼ 5 年か 10 年に一回行われ、5 回まで実施された。第 2 回は 1960 年、第 3 回は 1975 年、第 4 回は 1981 年、第 5 回は 1992 年に開催された。
- 3) 改戲とは演目の改革、改人とは役者への教育、改制とは演劇界の習慣の改革。
- 4) 1960 年 4 月 13 日-6 月 17 日、文化部が主催した「現代題材觀摩演出」で、当時文化部の部長を務めた斎銘燕は、戲曲改革の方針と演目の政策について、「我々は現代物（現代戲）、伝統戲、新作の歴史物（新編歴史劇）の三つを同時並行する」べきだと明確に主張した、これが「三並舉」の出典である。伝統戲とは、京劇を始めとする各地の戲曲で上演されてきた演目、現代物とは、共和国成立後に創作された、抗日戦や国共内戦での共産党や八路軍の戦いを題材にしたものや、革命後の生活を反映したもの、新作歴史劇とは、例えば、『李剛打朝』（拙稿 a、2014、124 頁）のように、共産党の政治宣伝のための新たな意味を付された新作の歴史物。
- 5) 1963 年上海市長の柯慶施の言葉。
- 6) 中国木偶芸術劇団の住所について、現在は北京市西城区宣内大街 183 号にあるが、元の住所は資料が見つからず、不明。
- 7) 幹部を農村へ行かせて思想改造させること。
- 8) 「毛沢東語録」を歌詞にした曲。
- 9) 毛沢東に忠誠心を示すため踊った集団舞踊で、1968 年に遼寧省で始まり、その後各地に普及した。
- 10) [http://www.china.com.cn/aboutchina/zhuanti/muou/2008-11/19/content\\_16791481.htm](http://www.china.com.cn/aboutchina/zhuanti/muou/2008-11/19/content_16791481.htm) (2014.9.22 閲覧)
- 11) 後ろの上演者を隠すために掛ける幕。
- 12) 杖頭木偶と同じ、舟山では「長拷木偶」と呼ぶ。現在、舟山で伝承されているのは、指遣いの布袋木偶戲だけである。
- 13) 侯惠義は 1927 年生まれ、解放前に專業の木偶芸人であったが解放後曲芸芸人として舟山曲芸隊で働いた。1983 年退職後、家族で個人經營の木偶戲班・侯家班を立ち上げ、2009 年まで活動していた。侯家班は舟山の代表的な木偶戲班であり、現在の班主は長女の侯雅飛で、後述する顧国芳は、その夫。
- 14) 「九一五派」と「紅衛派」は、当時、互いに相手を「保皇派」、自らを「造反派」と言って争った。

- 15) 東昇団員の経歴は拙稿 a、131-136 頁に参照。
- 16) 1970 年 11 月、東昇木偶劇団が所属した舟山専区曲芸木偶工作者協会は舟山曲芸隊に名前を変更した。
- 17) 文革中に建てられた幹部学校、実は幹部や文化人を集めて、肉体労働をさせ、思想教育をする場所。
- 18) 丁言昭（1991、145 頁）によれば、『雑談我国木偶戲』（王凜寒、『解放日報』1978.6.26）『繁花似錦、技芸高超—贊福建木偶藝術』（劉世今、『光明日報』1979.12.16）などの記事や、『傀儡戲起源小考』（俞為民、『南京大學學報』1980 年第 3 期）などがあつた。
- 19) 泰順県の泰順葉発木偶戲、平陽県の平陽木偶戲、蒼南県（温州市）の単档木偶戲、泰順県の泰順提線木偶戲、舟山市の定海布袋木偶戲、岱山県（舟山市）の岱山布袋木偶戲、三門県（台州市）の上鮑布袋木偶戲、江山市（衢州市）の江山廿八木偶戲、蒼南県（温州市）の蒼南提線木偶戲、麗水市の麗水提線木偶戲。

## ＜参考文献＞

### 著作

- 〔ソ連〕謝・奥布拉茲卓夫（オブラストォーフ）（1961）『中国人民的戲劇』中国戲劇出版社
- 中国大百科全書総編輯委員会（1983）『中国大百科全書』（戯曲、曲芸）中国大百科全書出版社
- 小島晋治、丸山松幸（1986）『中国近現代史』岩波書店
- 〔米〕MacFarquhar, R. 費正清編（1990）『劍橋中華人民共和国史』（上巻）中国社会科学出版社
- 丁言昭（1991）『中国木偶史』学林出版社
- 周恩来（1998）『周恩来文化文選』中央文献出版社
- 泰順県委員会文史資料委員会（2000）『泰順木偶戲』泰順文史資料第四輯、内部発刊
- 徐兆格（2005）『平陽木偶戲』平陽県文化新聞出版
- 氷上正ほか（2013）『近現代中国の芸能と社会』好文出版

### 論文（記事）

- 董天沢（1996）「浙江省木偶戲、皮影戲雑談」『戯文』1996 年第 3 期
- 雁書（1996）『「文革」中中国雜技団与中国木偶藝術劇団の『破四旧』』『北京党史研究』1996 年第 2 期
- 呉恒謙（2000）「祖伝第十三代木偶伝人—周徳」『泰順木偶戲』泰順県文史資料第四輯
- 杜一明（2009）「遼西木偶・民間的藝術瑰宝」『今日遼寧』2009 年 2 期
- 山下一夫（2013）「中国の影絵人形劇の改革とオブラストォーフ」『中国都市芸能研究』第十二輯、中國城市戯曲研究會
- 譚君（2013）「文革時期北京民衆的娛樂生活」首都師範大学 2013 年修士論文
- 拙稿 a（2014）「中国における民間芸能集団化の試み—舟山群島『東昇木偶劇団』を例として—」『新潟大学大学院現代社会文化研究』第 58 号
- 拙稿 b（2014）「集団化制度下の中国舟山群島『東昇木偶劇団』—芸人講習会と所得分配制度について—」『東アジア』23 号、新潟大学東アジア学会

### 档案

- 舟山市群衆芸術館所蔵舟山曲芸木偶協會档案（1958—68 年、1964 年、1972 年、1982 年）（未公開、档案と略す）

主指導教員（橋谷英子教授）、副指導教員（池田哲夫教授・飯島康夫准教授）